君を待っていた場所



ウソンとジソン

一緒につくる絵本 v07

まだ、だれもいなかったころのお話です。

空も、地面も、からっぽでした。

風が吹いても、髪をなびかせる子
はいません。
朝が来ても、目をこすって起きる顔はあり
ませんでした。

どなたかが、じっと思われました。
「ああ、愛したい。」

話したいことは、たくさんあります。
でも、聞いてくれる子がいませんでした。

そこで、あたたかな光をつくり、
やわらかな風が吹くようにされました。

小川がさらさら流れ、
木や草花が育つようにされました。

森のまんなかの、いちばん日当たり
のよい所に、
丸い木の食卓を置かれました。

だれかが来て、向かい合って座るのを待つ、
最初の席でした。



ある晴れた朝、
若草色の家の玄関が開きました。

「ジソン、早くおいで！
あそこに、見たことのない道がある！」

兄のウソンは、運動靴をはいて、
元気に先頭を歩きました。

弟のジソンは、玄関の段の前で、
少し立ち止まりました。

「お兄ちゃん、待って。
このドングリの帽子を見て。」

つやつやした帽子を拾って、
ポケットに、すぽんと入れました。



「お兄ちゃん、ここ見て。」

ジソンが、ウソンの服のすそを
ぎゅっとつかんで引きました。

草原の向こう、小道の先に、
丸い木の食卓がありました。

食卓の上には、小さな木のコップが七つ、
ぐるりと並んでいました。
まわりには、形のちがう椅子も。

「だれが、もう用意したのかな？」



そのとき、草むらの間から、
丸っこい仲間が、一人、また一人と出てきました。

みんなで分けるスープを持ってきたラッコ。
首に小さな葉をつけた、緑の恐竜ニョッキ。
丸い帽子のモリ。
そして、焼きたてのパンを持ってきたボリです。

「こんにちは。もしかして、君たちもこの道から来たの？」
ウソンが、うれしそうに手を振りました。





ウソンは、指を折って数えてみました。
「ぼく、ジソン、ラッコ、ニョッキ、
モリ、ボリ。」
でも、コップが一つ余りました。
椅子も一つ余りました。

ラッコは鍋を食卓に置いてから、
余ったコップをひょいと持ち上げました。
「ここにもスープを
分けて入れたらいいね。」

ジソンは、そのコップを両手で受け取って、
もとの場所に、そっと戻しました。
取っ手も、空いた椅子のほうへ向けて。
「これは、ここ。」

ボリは、持ってきたパンのかごを
食卓のまんなかに置きました。

焼きたてのパンから、
白い湯気が、ほわほわ上がります。

「みんなで食べようと思って、
少し多く焼いてきたんだ。」

いちばんきれいに膨らんだパンを、
ウソンとジソンの前に、先に置きました。



緑の恐竜ニョッキは、
食卓の横の草に、おなかをつけて低く
伏せました。

足元の葉の上を通るカタツムリのヌルに、
涼しい日陰をつくってあげるためです。

「ありがとう、ニョッキ。
つくってくれた日陰は、涼しいね。」

ヌルは、ゆっくり触角を動かして、
お礼を言いました。

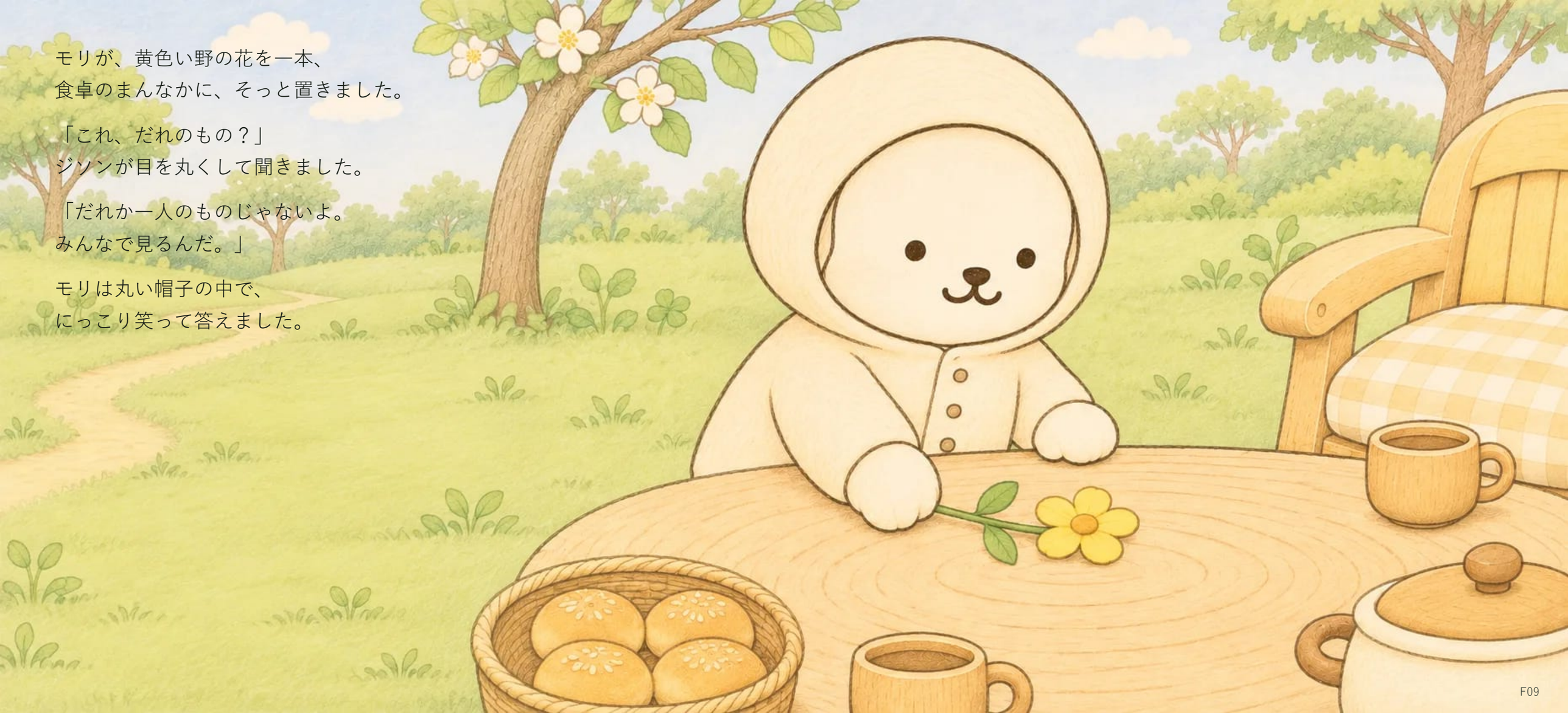


モリが、黄色い野の花を一本、
食卓のまんなかに、そっと置きました。

「これ、だれのもの？」
ジソンが目を丸くして聞きました。

「だれか一人のものじゃないよ。
みんなで見るんだ。」

モリは丸い帽子の中で、
にっこり笑って答えました。



小さな黄色い鳥のピオが、
食卓の端に、ぴょんと降りました。

「みんなでって言ったよね？ ぼくも、ここにいるよ！」

ジソンは、自分のパンから、
小さくてやわらかなかけらをちぎり、
ピオの前に置きました。

「ピオ、一緒に食べよう。」





子どもたちと仲間は、
丸い食卓を、ぐるりと囲んで座りました。
ラッコが、自分のコップにスープを
入れました。
「食べたい子は、コップをこっちへ。」
ウソンとジソンが、コップを差し出しました。

初めて会ったのに、
ずっと前から知っていたように、
笑い声が絶えませんでした。

枝の間から差す光が、
子どもたちの肩を、やさしく包みました。
空いた椅子の上には、もっと長くとど
まりました。

そのとき、風の中から、
とても静かな声が聞こえました。
「君と一緒に座りたかったんだよ。」

「お兄ちゃん、今、聞こえた？」
「うん。」
二人が、空いた椅子を振り返りました。

ボリとラッコが、空のかごと鍋を片づけました。

家へ帰る時間になりました。
ウソンとジソンは、座っていた椅子を、きちんと押し込みました。

「次に来る友達も、
気持ちよく座れるように。」

ジソンは、ポケットからドングリの帽子を出して、
空いた椅子の前の、コップの横に
置きました。
「ここに座っていいよ。」

日が木の後ろへ沈むまで、
光は、その席を離れませんでした。

その席に、どれほど長いあいだの思いがこもっているのか、
子どもたちは、まだ知りませんでした。

